

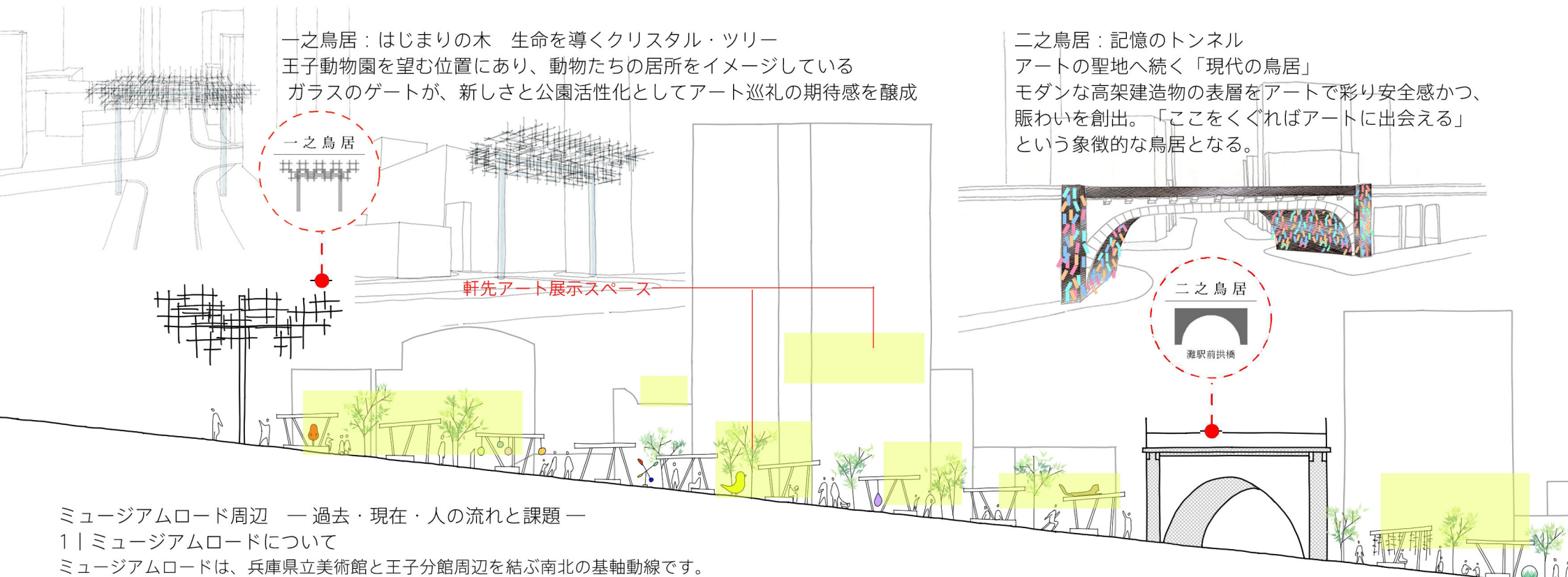
感性がほどける、アート参道

The Pilgrimage for Art

神戸・灘区の「ミュージアムロード」は、兵庫県立美術館の南北軸が印象的ですが、街の生活動線との“間”が弱く、アートの風景が点で止まってしまっています。ここでは「アート詣でする参道的体験」と「アートと日常の再接続」を軸に提案します。

一之鳥居：はじまりの木 生命を導くクリスタル・ツリー
王子動物園を望む位置にあり、動物たちの居所をイメージしている
ガラスのゲートが、新しさと公園活性化としてアート巡礼の期待感を醸成

二之鳥居：記憶のトンネル
アートの聖地へ続く「現代の鳥居」
モダンな高架建造物の表層をアートで彩り安全感かつ、賑わいを創出。「ここをくぐればアートに出会える」という象徴的な鳥居となる。



ミュージアムロード周辺 一 過去・現在・人の流れと課題

1 | ミュージアムロードについて

ミュージアムロードは、兵庫県立美術館と王子分館周辺を結ぶ南北の基軸動線です。

海と山に挟まれた神戸らしい地形を背景に、文化施設を核とした都市軸として構想され、街路景観やアートが点在する屋外ミュージアムとして位置付けられています。

2 | 現在の人の流れと利用実態

現在のミュージアムロードは、平常時の歩行者数が少なく、美術館利用者以外の滞留がほとんど見られません。人の流れは、駅から美術館へ「目的地として直行」されており、周辺の目的地が定着していないことが読み取れます。

3 | 時間帯・曜日による偏り

平日昼間：閑散 夜間：照明・目的不足で滞在価値が弱い 週末・イベント時：一時的に人が集まるが継続性がない →結果として、使われない時間の方が圧倒的に長い街路となっています。

4 | 場が抱える主な問題点

- | | |
|------------------|-------------------------------------|
| ① 文化施設と街が分断 | 美術館は目的地として完結しており、街路や周辺施設への波及が弱い。 |
| ② 活動の「点在化」 | 多くのアートや施設は存在するが、連続した体験としてつながっていません。 |
| ③ 日常が入る余地が少ない | 滞留・参加の仕組が週末やイベントのみで住民や来訪者が関与しにくい。 |
| ④ 夜間・非イベント時の魅力不足 | 昼夜・平日休日で使い分けられる構造になっていません。 |

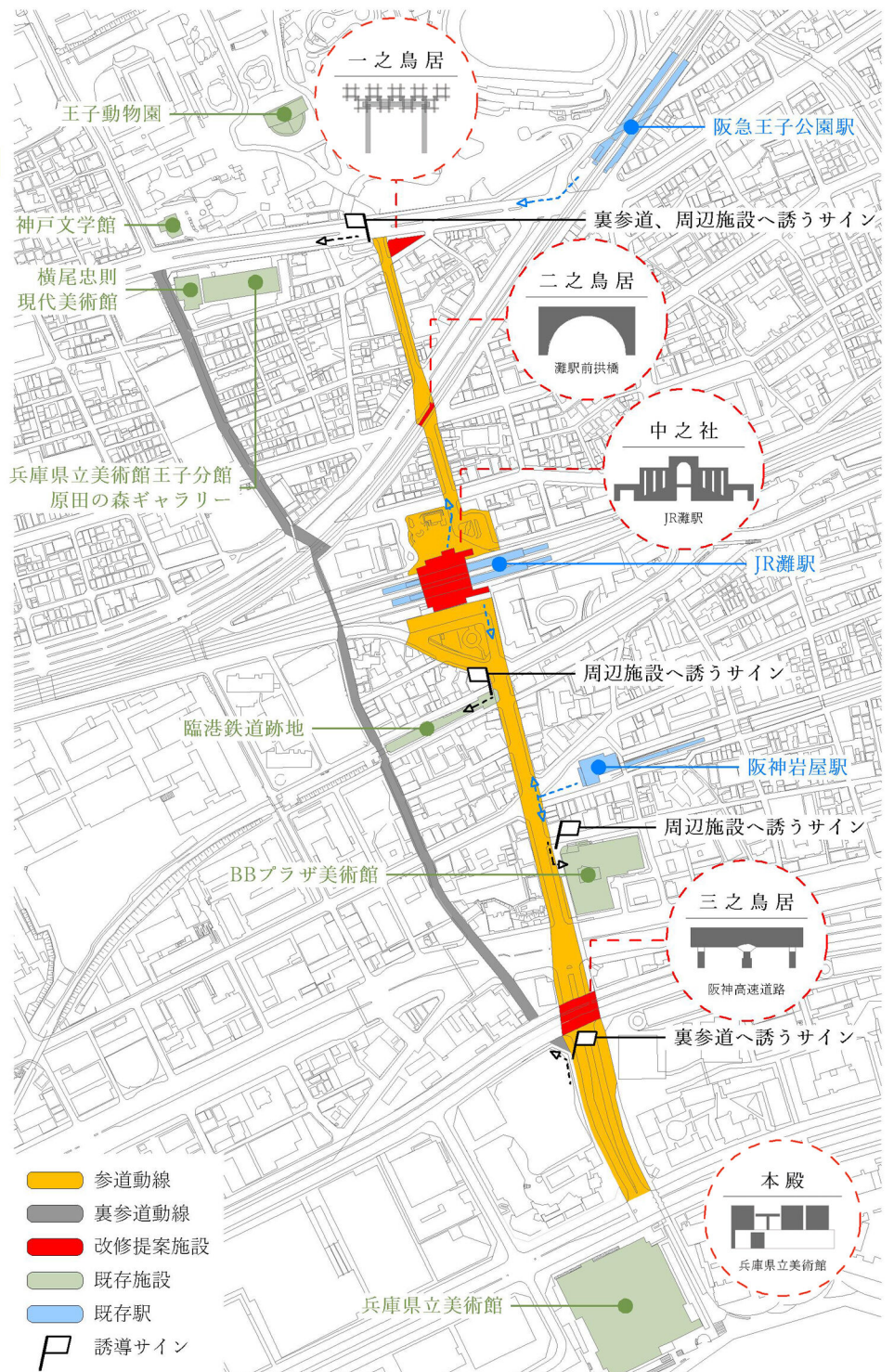
5 | これらから導かれる問い

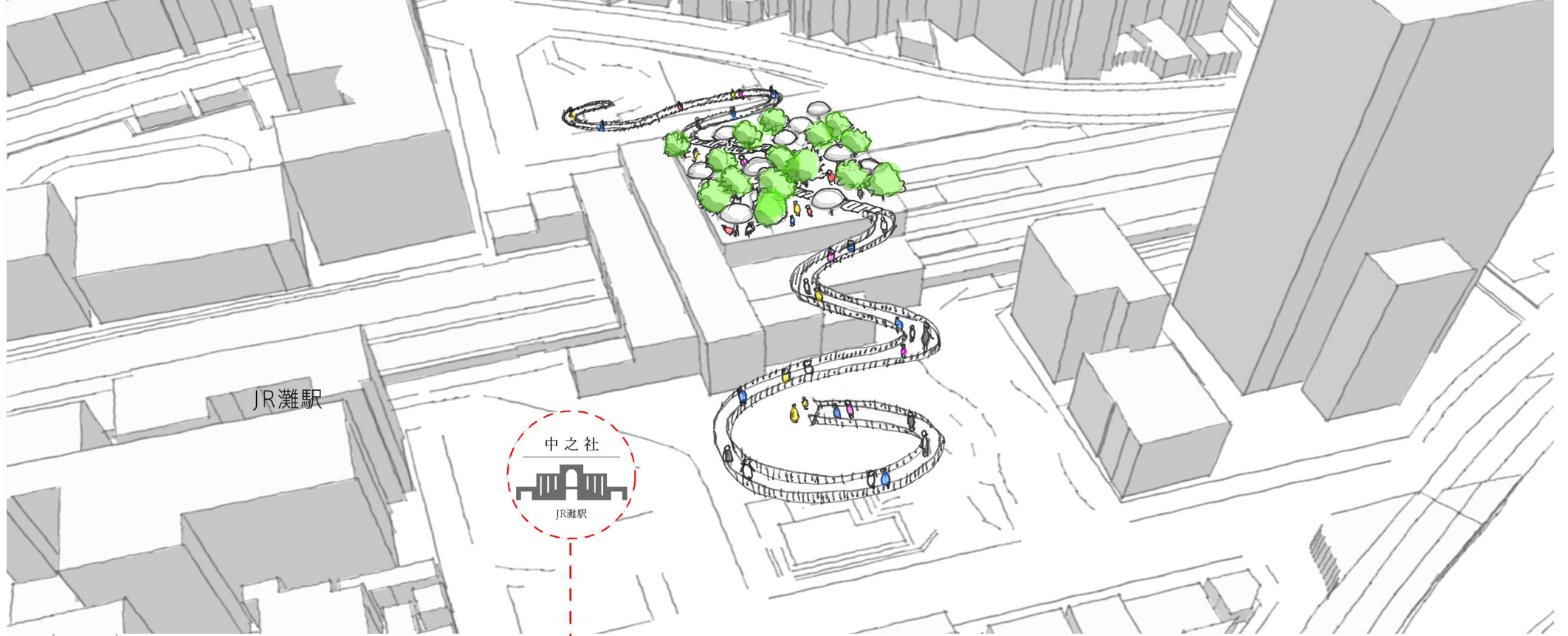
なぜ、この道は「文化の軸」でありながら、日常の文化の道になれていないのか。

この問いに対し、本提案では「アートを展示物ではなく、街と人をつなぐ媒介として再定義する」

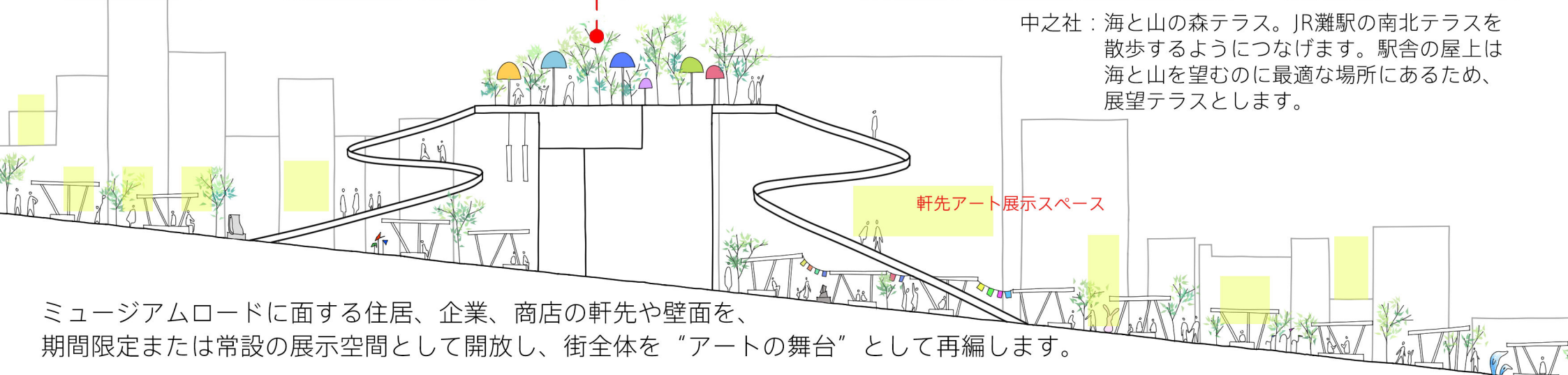
ことで、ミュージアムロードを通過の道から、会いに行く「アート参道」へと転換する事を目指します。

本提案は、ミュージアムロードの歴史的背景と現在の利用実態を踏まえ、物理的更新ではなく都市の使い方そのものを再設計する試みです。





中之社：海と山の森テラス。JR灘駅の南北テラスを散歩するようにつなげます。駅舎の屋上は海と山を望むのに最適な場所にあるため、展望テラスとします。



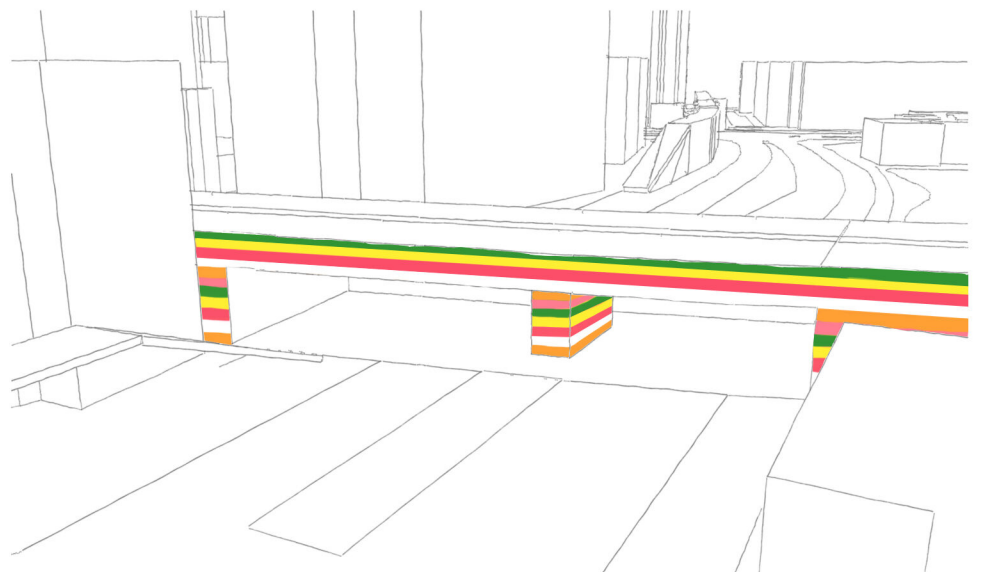
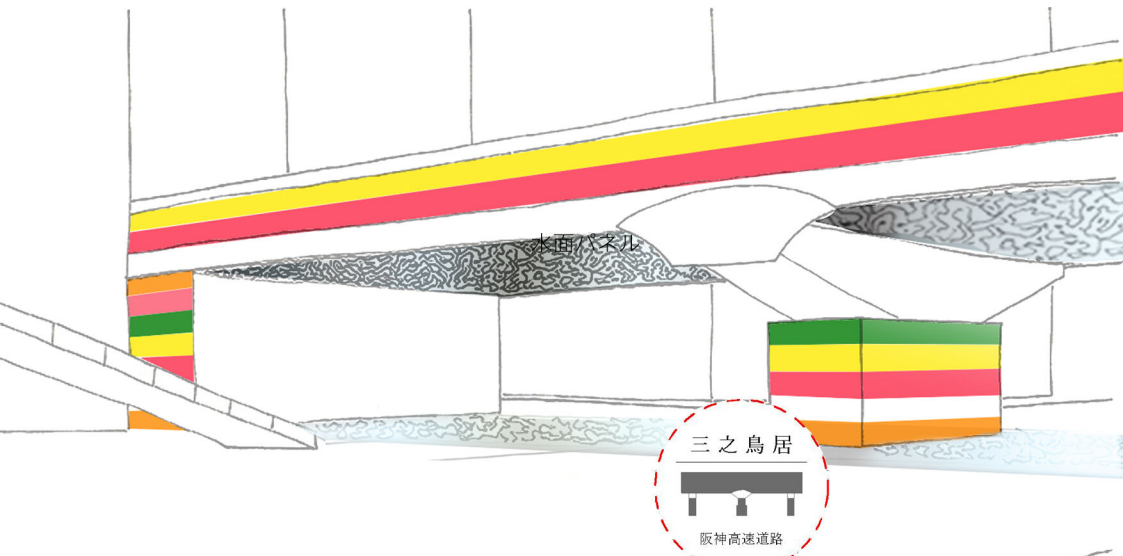
ミュージアムロードに面する住居、企業、商店の軒先や壁面を、期間限定または常設の展示空間として開放し、街全体を“アートの舞台”として再編します。

歩道沿いの建物群が連続的なギャラリーとなり、ミュージアムロードそのものが「アート参道」として都市空間へ浸透します。単にアート作品を街に置くのではなく、空間を貸し、作品が集客を生み、商いが交流を生む、ビジネスとして成立する仕組みを内包します。例えば、企業はCSRやブランディングとして参加し、商店は集客として機能し、住民はエリア価値の向上を受益するでしょう。多様な関係人口が参道の担い手となり、文化的生産と経済的循環が並走する地域モデルが形成されます。一方、軒先に展示されるアートは、観賞だけでなく、ワークショップ・物販・公開制作など、多様な形式に拡張できます。何故ならば、道路沿いに布設される屋根やベンチの連続群が来場者を向かい入れ、発生する様々な出来事が、偶発的な出会いや対話を誘発し、無関心や通過型の動線に「滞留と参加」を生み出します。また少し軸を反れる原田の森ギャラリーへは「裏参道」として同じ道を往復することなく駅や施設など、各点を結ぶ別の軸としても機能します。

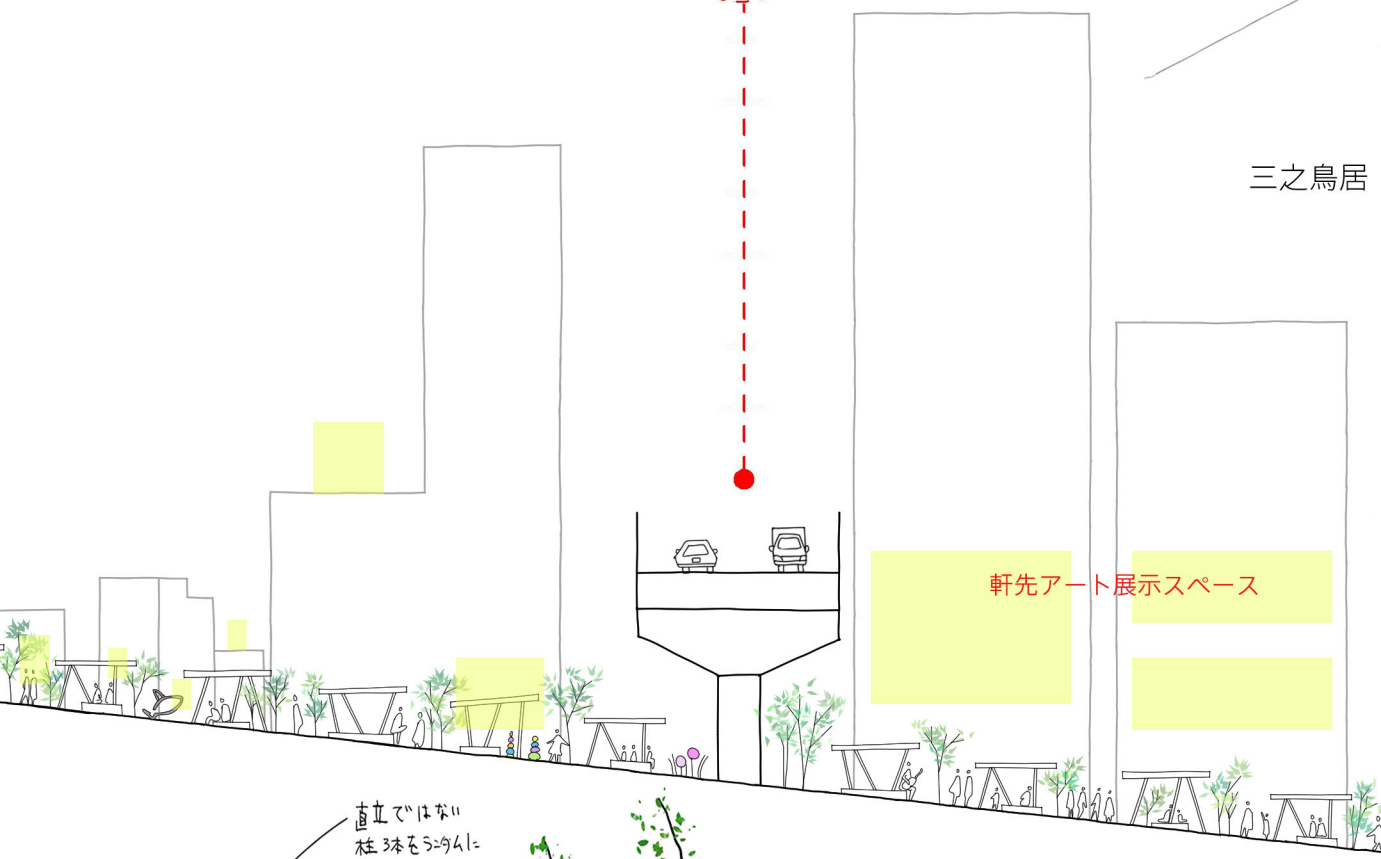
その結果、ミュージアムロードは、建物の内側で完結するアートから、街路に浸み出し、生活者や来訪者と混ざり合うアートの舞台へと変容します。地域活性化、クリエイティブ産業の創出、文化的波及効果を同時に狙う、都市スケールでの社会実装となります。

街の軒先ギャラリー展示イメージ

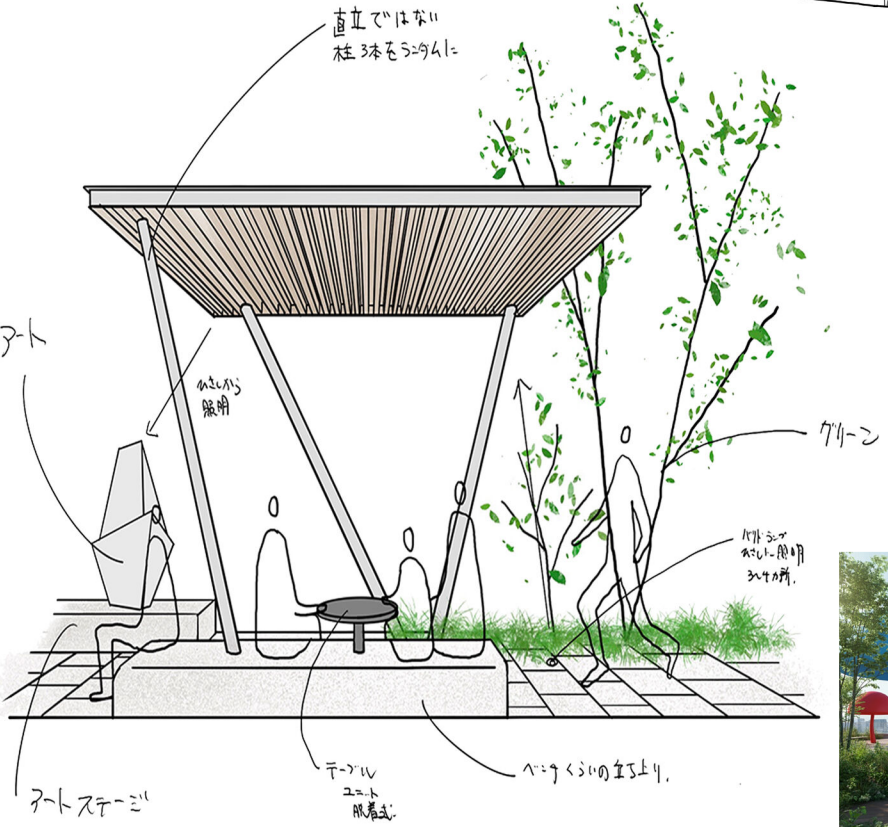




三之鳥居 (阪神高速) イメージ



本殿
兵庫県立美術館



連続する、みちの待合所

三之鳥居
 ゆらぎの門
 都市の静寂を彩る「水面のアンダーパス」

【演出のポイント】
 ・水面パネルの設置：高架を支える梁、底面にステンレス製の水面パネルを配置
 ・光のゆらぎ：パネルの凹凸が光を乱反射させ、周囲に幻想的な水紋のゆらぎを投射
 【期待される効果】
 ・空間変革：暗く圧迫感のある高架下を、開放的でアート性の高い歩行空間へと刷新
 ・非日常的なランドマーク化：無機質な都市インフラから都市の新たなスポットとして変容



水面パネル

中の社
 海と山の森テラス
 海と六甲山系をつなぐ都市の間

【演出のポイント】
 ・シンボリックな景観：キノコ型オブジェを群生させ屋上に森の風景を再現
 ・自然との調和：豊かな樹木とアートで山と海の青を繋ぐ展望台
 【期待される効果】
 ・地域活性化：アートのある駅屋上として駅周辺の回遊性を向上
 ・新たな憩いの場：景色を眺めながらリフレッシュできるサードプレイス



森のテラスオブジェ

二之鳥居
 記憶のトンネル
 アートの聖地へ続く「現代の鳥居」

【演出のポイント】
 ・素材の対比：コンクリート (伝統) と、エキスパンドメタル (現代)
 ・可変するキャンパス：メッシュに季節や、イベントで作品を掲げられる動くアートの壁

【期待される効果】
 ・聖地化：ここをくぐればアートに出会える
 ・回遊と滞留：美しいトンネルが作品となり、歩行者が足を止め、撮影し、発信したくなる流れを創出

- 地元製の鋳造所のアルミを使ったエキスパンドメタル
- 定期イベント時の活用
マラシェ：旗を掛ける
ワークショップ：作品を飾る
ギャラリー：写真や絵を飾る
- 季節イベント時の活用
端午：鯉を掛ける
七夕：短冊を掛ける
夏祭り：提灯を飾る

一之鳥居
 はじまりの木
 生命を導くクリスタル・ツリー

【演出のポイント】
 ・生命 (動物たち) の止まり木：「生きたアート」
 ・光のプリズム：昼は虹色に、夜は樹氷のように輝く光の陸標

【期待される効果】
 ・シンボル創出：ガラスのゲートが、公園活性化のフォトスポットに
 ・「アート詣」の起点：二之鳥居と共にアート巡礼の期待感を醸成

